

# 高等学校における地誌学習のあり方について

大正大学教授

中嶋 則夫

## I. 公民としての資質・能力の育成

「公民としての資質・能力の育成」は、小・中学校社会科、高等学校地理歴史科、公民科に共通した目標である。小学校社会科や中学校社会科の各分野、地理歴史科、公民科の各科目（以下「各科目等」とする）の学習では、その特性に応じた「見方・考え方」（総称は「社会的な見方・考え方」）を働かせて、課題を追究したり解決したりする活動を通して公民としての資質・能力を育成する。各科目等にはこの目標の実現に向けてそれぞれに固有の役割がある。

共通の目標に向けた学習の過程では、同一の現象が繰り返し扱われることがあるが、生徒が同じ学習の繰り返しと捉えることなく、成長を実感できる指導の工夫が必要となる。中学校の地理的分野や「地理総合」、「地理探究」といった地理学習の校種間、科目間の接続のみならず、中学校の分野間、高等学校の教科間や領域間の関連を意識したカリキュラム・マネジメントが重要であり、教師が生徒の既習事項を把握し、指導に活かす必要がある。

例えば、中学校地理的分野の学習は第2学年で終えるため、第3学年で学習する近現代の歴史や公民的分野の学習の成果を生かすことはできない。一方で、「地理総合」では、地理的分野の学習の成果だけでなく、歴史や政治、法、経済などに関する概念も活用することで、多面的・多角的な考察の深まりが期待できる。各校で履修する科目の構成や実施時期が異なる高等学校においては、学校ごとに異なる多様な連携が考えられる。

## II. 中学校、高校における地誌学習

公民としての資質・能力の育成に向けて、地誌学習にはどのような役割が求められているのだろうか。高等学校における地誌学習のあり方を考えるにあたって、中学校でどのような学習が行わ

れているか理解する必要がある。

中学校社会科の地理的分野では、表1に示した中項目で世界や日本の諸地域の地域的特色を理解する学習、いわゆる地誌学習が設定されている。表1はそれぞれの学習でねらいとする知識及び技能に関する主な事項の概要をまとめたものである。

表1 中学校の地誌学習で習得する知識、技能の概要

<p>B (2)「世界の諸地域」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世界各地で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解すること。</li> <li>・世界の各州に暮らす人々の生活を基に、<u>各州の地域的特色を大観し理解</u>すること。</li> </ul>
<p>C (2)「日本の地域的特色と地域区分」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・①自然環境②人口③資源・エネルギーと産業④交通・通信の各項目の地域的特色を理解すること及び、それに基づく地域区分を踏まえ、<u>我が国の国土の特色を大観し理解</u>すること。</li> <li>・各種の主題図や資料を基に、地域区分をする技能を身に付けること。</li> </ul>
<p>C (3)「日本の諸地域」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幾つかに区分した日本のそれぞれの地域について、その地域的特色や地域の課題を理解すること。</li> <li>・①から⑤までの考察の仕方*で取り上げた特色ある事象と、それに関連する他の事象や、そこで生ずる課題を理解すること。</li> </ul> <p>※①自然環境、②人口や都市・村落、③産業、④交通や通信、⑤その他のそれぞれの事象を中核とした考察の仕方</p>

B (2) では世界の各州、C (2) では日本全体の地域的特色を大観して理解することがねらいとなっている。歴史や公民的分野の学習においても、社会的事象を考察するにあたって、主要な地名とその位置などに関する知識も含め、考察の基盤となる地理的認識が必要である。そうした役割がこれらの中項目にはあるように思われる。

一方で、C (2) では主題図や資料を基に地域区分をする技能の習得、C (3) では中核とした事象とその他の事象との関連に着目した動態地誌的な考察を通して、事象間の関係性を理解することが求められている。自然環境と産業や人口との

関連、都市・村落と交通との関連など、事象間の相互関係の傾向性を理解することは、任意の地域の特色を捉えたり、地域的課題の解決に向けて構想したりする際に有効に機能することが考えられる。地誌学習では、地域の特色や課題の構造を捉えるために必要な知識や技能の習得も重要なねらいとなっていると言えよう。

「地理探究」の地誌学習（大項目B「現代世界の地誌的考察」）においても、（1）「現代世界の地域区分」の学習で、地域の概念、地域区分の意義などについての理解を図ったうえで、（2）「現代世界の諸地域」において「地誌的に考察する方法」を身に付けることが求められている。

地誌学習では、各地域の特色や課題についての理解を深めたり、それらへの関心を高めたりすることが重要なねらいである。その一方で、地域の広がりや結び付きなどに着目して考察することの有用性を理解し、その後の学習において発揮される力として身に付けることも必要である。単に地誌的な知識を習得するだけでなく、地域は様々な事象が複雑に関連して成立しているという視点に立ち、「地域」に着目して考察する力を育成する必要がある。

「地理的な見方・考え方」を構成する5つの視

点のうち、「地域」は、地誌学習を行う中項目の他に、分野や科目のまとめとして位置付けられ、地理的な課題について「構想」する中項目においても共通して着目すべき視点として示されている（図1）。地誌学習は、地理的な課題の解決について「構想」する学習の基盤として位置付けられていると言えよう。

「地域」に着目することは、様々なスケールにも配慮しつつ、分布パターンや場所の特徴、生活と自然環境との関わり、他地域との結び付きに着目するなど、地理的な見方・考え方を総合的に働かせる姿が想定される。社会に見られる課題の解決に向けて構想する際には、地理学習で身に付ける地域の実態を踏まえた考察が必要である。「地域」に着目して考察する力を培うことは、「公民としての資質・能力の育成」にあたって、地誌学習が担うべき重要な役割である。

### Ⅲ. 「地理総合」における「地域」に着目した考察

「地理総合」において地誌学習は位置付けられていないが、着目すべき視点として「地域」が例示されているのは、科目のまとめであるC（2）「生活圏の調査と地域の展望」に加えて、B（2）「地球的課

中項目 = 内容のまとめ		位置や分布	場所	人間と自然環境との相互依存関係	空間的相互依存作用	地域
中学校地理的分野	A(1)地域構成	●				
	B(1)世界各地の人々の生活と環境		●	●		
	B(2)世界の諸地域				●	●
	C(1)地域調査の手法		●			
	C(2)日本の地域的特色と地域区分	●				●
地理総合	C(3)日本の諸地域				●	●
	C(4)地域の在り方 <b>構想</b>				●	●
	A(1)地図や地理情報システムと現代世界	●				
	B(1)生活文化の多様性と国際理解		●	●		
	B(2)地球的課題と国際協力				●	●
地理探究	C(1)自然環境と防災			●		●
	C(2)生活圏の調査と地域の展望 <b>構想</b>				●	●
	A(1)自然環境		●	●		
	A(2)資源、産業～A(5)生活文化、民族・宗教		●		●	
	B(1)現代世界の地域区分	●				●
B(2)現代世界の諸地域				●	●	
C(1)持続可能な国土像の探究 <b>構想</b>				●	●	

図1

題と国際協力」とC(1)「自然環境と防災」である。

とりわけB(2)は、「空間的相互依存作用」と「地域」に着目した考察が想定されていることに注目したい。

表2 「地理総合」B(2)で身に付ける知識の概要

B(2) 地球的課題と国際協力 ・世界各地で見られる地球環境問題、資源・エネルギー問題、人口・食料問題及び居住・都市問題などを基に、 <u>地球的課題の各地で共通する傾向性や課題相互の関連性</u> などについて大観し理解すること。 ・世界各地で見られる地球環境問題、資源・エネルギー問題、人口・食料問題及び居住・都市問題などを基に、 <u>地球的課題の解決には持続可能な社会の実現を目指した各国の取組や国際協力が必要であること</u> などについて理解すること。
--

ここでは、世界各地で見られる地球的課題について多面的・多角的に考察する力を育成するとともに、地球的課題の傾向性や課題相互の関連性を大観し、各国の取組や国際協力の必要性などを理解できるようにすることが求められている。世界各地で見られる地球的課題の現状を、個々の事象の地域的な結び付きや広がりから捉えたり、地域性を踏まえた課題解決の方向性といった側面から捉えたりすることなどが想定される。

例えば、発展途上国では人口増加に起因する人口問題が広く見られるといった傾向性ととともに、人口問題がその国の食料問題や居住・都市問題とも影響し合っているといった課題相互の関連性について理解する必要がある。その際、中学校で学習した各州の地域的特色や各州で顕在化している地球的課題についての知識を活用して、さらに理解を深めることが期待される。また、現代世界の地理的認識が乏しく動態地誌的な考察の経験もない中学校第1学年の段階では難しいが、「地理総合」の学習においては、地球的課題の解決の方向性を、事例地域を基に動態地誌的に考察することも考えられる。

C(1)「自然環境と防災」では、自然災害の備えや対応などを、必要に応じて中学校理科の学習成果も活用して人間と自然環境との関わりの視点から捉えたり、地域性を踏まえた防災を地域の共通点や差異、持続可能な地域づくりといった側面から捉えたりすることなどが想定される。防災を

テーマに生活圏などの具体的な地域を対象として考察することを通して、防災意識を高めるとともに、新旧地形図やハザードマップなどの基礎資料を活用する地理的技能や、地域の自然及び社会的条件に着目し、地域性を踏まえて考察する力を育成することが期待される。

#### IV. 「地理総合」B(1)「生活文化の多様性と国際理解」の学習のあり方

地誌学習と捉えられがちな「生活文化の多様性と国際理解」の学習については、中学校の学習の単なる繰り返しや、「地理探究」における地誌的考察との重複にならないよう「厳に留意する必要がある」(『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』)とされている。ここでの考察の対象は、生活文化の多様性や変容の要因であり、地域的特色ではない。ねらいは、中学校地理的分野B(1)の成果をさらに発展させ、生活文化の多様性や変容の要因を地理的環境に着目して考察する力を身に付けることである。

表3は「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【高等学校 地理歴史】」を基に作成した単元の学習の展開例である。

導入では、中学校地理的分野の大項目B「世界の様々な地域」などの学習成果を生かし、世界の食文化について調べる活動が設定されている。中学校の学習との接続を図り、気候や宗教の分布図を活用して、今後の学習で必要な基礎的・基本的な知識を確認しつつ、「生活文化の多様性と国際理解」について課題意識を持たせたり、学習課題の解決の見通しを持たせたりすることが考えられる。

Step 1～3では、衣食住などをテーマに、生活文化が地形、気候などの自然環境や、歴史的背景、産業などの社会環境から影響を受けて多様であるとともに、地理的環境の変化に応じて変容することを理解する。その過程では、関連する事象の空間的な規則性や傾向性を踏まえたり、近代化やグローバル化などの歴史の変化や、政治、法、経済などに関わる諸概念を活用したりすることで、考察の程度を中学校のそれよりも深化させることが考えられる。また、事例として取り上げた事象の一般的共通性と地方的特殊性を把握するこ

表3 「地理総合」B(1)の学習の展開例

導入	食文化について中学校での学習成果（気候や宗教の分布、気候と農業の関わりなど）を生かした考察 →単元全体に関わる問いの設定 <u>「多様な生活文化に配慮して世界の人々が共存するためにどのような工夫が必要なのだろうか」</u>
Step1 食文化の多様性	<u>「食文化の基本となる農耕文化は、どのようなものがあり、どのように分布しているのだろうか」</u> ＝農業と食文化との関わりなどについての考察
Step2 住居の多様性	<u>「私たちの先人たちは、身の回りの環境とどのように接し、どのように守ってきたのだろうか」</u> ＝都市や村落の伝統的な景観と地理的環境との関わりや保全の意義などについての考察
Step3 多様な衣服と変容	<u>「地域によって人々の衣服の変化の仕方に違いがあるのはなぜだろうか」</u> ＝社会環境やその変容が衣服に与える影響などについての考察
Step4 多様性への配慮と工夫	<u>「生活文化の多様性に配慮するためにどのような取組が行われているのだろうか」</u> ＝様々な文化の伝播や受容や異なる文化が共存するための工夫についての考察
まとめ	学習全体を振り返り、単元全体に関わる問いについて自分の考えをまとめる活動

国立教育政策研究所（2021年）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校 地理歴史】』事例2を基に作成

とで、地理的環境と生活文化との関係性について理解を深めることも考えられる。

教科書にはこうした学習に資する事例が豊富に掲載されているが、その内容を整理しただけでは目標には到達できない。事例の考察を通して深い理解に至るためには十分な時間が必要である。全ての事例を扱うのではなく、目的に応じて「選択」する必要がある。

なお、Step 4では、生徒の関心に基づいてテーマを設定し、文化の伝播や受容の過程について調べる学習が想定されている。単元の学習の成果を活用し、場所の自然及び社会的条件との関わりなどに着目して多面的・多角的に考察する力の育成を企図したものと考えられる。

また、Step 4では、この中項目のねらいである「自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性」の理解に関する活動として、異なる文化が共存するための工夫について考察する学習も想定されている。「自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性」について理解することは、生活文化の多様性や国際理解について主体的に追究しようとする態度の育成に資するものであり、その

後の学習や社会生活にも影響するものである。この中項目さらには「地理総合」を学習する意義として重視する必要がある。

## V. むすび

中学校と高等学校の学習指導要領解説（中学校社会編と高校地理歴史編）には共通して、「まだ見ぬ地域を知ったり、知るための学び方や調べ方を学んだりすることは、成長期の生徒にとって、本来、楽しいことであり、学びがいのあることである。しかし、実際には、知識を詰め込む学習に陥ったり、人間の営みとの関連付けが不十分だったりすることが少なくない」との記載がある。これは地誌学習にも共通した課題であるように思われる。地理学習で身に付けた資質・能力を、学習後も生きて働く力とするためには、地理的な事象や世界の諸地域に対する純粋な関心の高まりが欠かせない。地域の様々な事象を扱う地誌学習にはその原動力となる魅力がある一方で、地域の網羅的な知識の習得に執着しすぎた学習に陥りやすいという側面を持つ。

全ての高校生が必ず学ぶ科目として設定された「地理総合」の学習では、文化的多様性や地球的課題、防災、持続可能な地域づくりなどの社会に見られる地理的な課題について、多面的・多角的に考察したり構想したりする力を高める。その上に立つ「地理探究」の学習では、地理学習の集大成として、系統地理的、地誌的に、概念などを活用して探究する力を育成する。学習指導要領では、一連の学習を通じてこうした各科目の目標が実現できるよう、中項目ごとにねらいが設定されている。その記載内容を基に、教材や生徒の実態を踏まえて具体的で明確なゴールイメージを描き、その実現に向けて指導と評価を行う必要がある。

## 参考文献

- 文部科学省（2018）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』、東洋館出版社、237p.
- 文部科学省（2019）：『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説社会編』、東洋館出版社、451p.
- 国立教育政策研究所（2021）：『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校 地理歴史】』、東洋館出版社、180p.